春日野

春日野に落ちたる藤の花見ればあな螺鈿か
と思はれしかな

生駒志貴はるかに霞むたそがれの春日野に
出でものをおもへる

月夜よしさまよひゆかば吾妹子に逢ひもや
せむと春日野をゆく

奈良の春

春は來ぬわがかなしみのいや深く雪消の澤
の雪も消なくに

いにしへも戀人たちは春來れば淺茅が原に
若葉摘みけむ

春來れば若草山に草萠えて土佐繪の山とな
りにけるかな

春の日はしづかに暮れぬ香具平畝傍平は草
青うして

しみじみと春の愁をうたはむと歌巡禮す奈
良の寺々

三笠山

旅なれば愁は多し春日なる三笠の山に立ち
て歎かむ

一夜

あはれなる采女のはなし身に染みて奈良の
一夜の君を忘れず

奈良の秋

天平のものの香すなり秋風が正倉院の塵に
吹くとき

秋風はよよとし泣きぬ奈良に來て風も無常
をさとりたりけむ

しみじみとものを思へる旅人に奈良の時雨
は何をささやく

秋篠寺

さびしさに秋篠寺にゆく路を佐紀の少女に
たづねけるかも

佛足堂

末法の世をなげきわびありがたき佛の足に
錢たてまつる

西大寺

しみじみと歎くは誰ぞ西大寺この宵闇に泣
く音きこゆる

新薬師寺

薬師寺の薬師如來ももの云はずこの秋の日
のしづかなるかも

寺と旅人

春日風奈良の七つの寺も吹くこのあはれな
る旅人も吹く

海の悲しみ

（長崎・天草）

序歌

山荒く海きほへども少女らはうつくしと云
ふ筑紫よく見む

海路

旅ゆくかあるは戀より遁れしか知らずうつけて海にうかびぬ

はじめの日何の思か身にあらむただいたづらに山見海見る

針に頼るあらずおのおの君に頼る船なし海にただわれらあり

わが船はわれらを乘せしよろこびに潮に吸
はれてわだつみをゆく

海の路わかぬばかりに霧降りぬ君がこゑす
るかたへ船やる

或る夜

漏刻の水落ちつくすさびしさをこの夜おぼ
えつ夏の旅寐に

筑紫入

遠つ代かはた近つ代かわかぬ日のなかに住
む子は筑紫路に入る

長崎

いづれともわかなく君もながむらむ鎌倉の
海長崎の海

いにしへはころべころべと繪を踏ますいま
たはむれにわが足踏ます

圓山の錦繪をかししみじみと紅毛人のあそ
ぶ春の日

圓山の遊女の文のあはれさをじやがたら文
にたとへけるかな

おもしろく鳴子を鳴らす圓山の辻占賣も秋
をかなしむ

わが友よ五月はあまり夢おほく成らずと云

ふか長崎の曲

あかつきのわかれは悲し長崎の鳥はなさけ

を知らずして啼く

旅の戀

旅ゆけば康棣の衣もおもしろと或る夜かづ

きて君がり通ふ

波越えて通はましとは楫まくらよきに慣れ
たる君の言葉か

南國は閻浮提金の空のいろかかるゆふべに
君を抱かむ

海のかぜ葡萄のにほひ脣のおとをおもへば
こころ騒ぎぬ

ああその夜無花果の葉のあなたよりのぞき
し星をえこそ忘れね

鴎

はるばるとさすらひ來れば鴎さへ善知鳥の
ごとく悲しげに啼く

船唄

あたらしき船唄かなし松の葉の琉球組の唄
のごとくに

稲佐少女

つれなくも稲佐少女はことさらに酸き木の
果をわれに與ふる

天草少女

君に似し天草島のたをやめが髪おもしろし
總角にして

筑紫歌

（九州）

筑紫歌

うつし身のこの瞰のつくところ筑紫の土は
なつかしきかな

遠つ代のものがたりめく山ありて悲しきと
ころ筑紫よく見む

はしけやし少女にまことありと聽くうれし
きところ筑紫よく見む

筑紫の旅

筑紫路はやうやく深し山越えてわがかなし
みもいよよ深しも

今ははや君と往くべき道もなしひとりはか
なく筑紫路をゆく

これやこの流離の旅にあらねども筑紫と云
へばはるかなるかも

短か世の旅のなかなる旅にして短き命惜し
まれしかな

男なれば涙をかくす術を知る旅にのがれて
君を忘れむ

苦しければ旅にも出でぬ筑紫路はわがかな
しみの棄てどころかな

筑紫ゆき旅にまぎれてありつれどなほ麻の
葉の帯を忘れず

かにかくに君は遠しと思へばかうたた寂し
き旅もするかな

忘れむとせしあさはかの心より懺悔の旅す
君をはなれて

現身は筑紫にあれどたましひは君をもとめて行方知らずも

ひとり來て筑紫の土を踏むことがすでに悲しきことと知りきや

怒

いたづらにわれたはれ男の聲高しいきどほろしく旅に死ぬべき

筑紫少女

ただありのあはつけ人の情さへ忘れずと云
ふか筑紫少女は

心寄れば情ありげに聽こゆるよ筑紫少女が
筑紫なまりも

あやぶみぬ筑紫少女はその胸を水甕のごと
おもへりと云ふ

消息

筑紫なる阿蘇のけむりの絶ゆるとも變らじ
と云ふ消息も書く

はるばると筑紫に來つと文遣りぬかのいに
しへの防人(さきもり)のごと

かなしみの數々書きしわが文を筑紫ぶみと
は誰の名づけし

防人の歌

いにしへの防人たちも筑紫路に來て孀を戀
ふ歌をうたへり

博多の一夜

ほのぼのと筑前博多の帶しめてものを云ひ
けむ君を忘れず

秋風は筑前博多の帶に吹くなほ麻の葉の帶
に吹くごと

かりそめの戀がたりさへ身に染みて博多の
一夜忘れがたかり

君に

筑紫ゆき去年わが靴の踏みにたる土をし踏
まばこころ躍らむ

不知火の筑紫の海に棄てにゆく君の心の惜しくもあるかな

かなしげに君はいそぎぬ筑紫路に殯(もがり)をつくる少女ならねど

筑紫歌跋

秋來れば旅の歌などきれぎれに胸にうかびて筑紫戀しき

—旅の歌了—

大正八年八月十一日印刷
大正八年八月十五日發行

（定價金八拾錢）

《旅情》

著作者　吉井勇

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町（八〇九番）（八九九番）

振替（東京）一七二番

印刷所　東京市神田區宮本町八番地
電話下谷四〇六七番
印刷者　高橋治一　新潮社印刷部

■現代自選歌集■

吉井勇氏新著

—六版出來—

◉吉井勇集

▼特製極美本
▼定價七十五錢
▼郵送料六錢

著者が從來「酒ほがひ……片戀……昨日まで……戀愛小品」—等全集の公にせる「……水莊記……仇情……黑髮集……未練」—精粹を揭ぐ。

■古の在五中將、再び生れてこゝにこの熱情の詩人とはなりけむ。吉井勇氏が半生の歌の中より、その精を拔いてこの一卷を編みけるに、あはれ見よ、一千三百首悉くこれ戀の歌也。かなしき戀、をかしき戀、いとせめて命死ぬ可き戀もあれば、いつの夜の夢の亂れと、思ひ捨てたるもあり。片おもひのはかなき、相思のこまやかなる、或は優麗、或は哀婉、句々とりぐのあはれをこめて、紅紫眼もあやに亂れたり。正にこれ上下三千年を貫いて、歌壇第一の大戀愛歌集也。■

若く涙多き詩人吉井氏が「熱血を傾倒せる戀愛歌集也」—

祇園歌集

吉井勇著

▼夢二氏裝畫—第五版—
▼價六十五錢
▼送料八錢

「祇園」「島原」「嵐山」「宇治」「南地」—の五篇に分ち、三百首を收む。概ね新作にかゝる。京は詩の都、戀の都也。若く涙多き詩人が此地に於いて情熱の湧くがまゝに歌へる戀の歌のかず〳〵、近時の詩壇、稀有の異彩と稱せらる。

東京紅燈集

吉井勇著

▼夢二氏裝畫—第二版—
▼價六十五錢
▼送料八錢

「紅燈行」「遊里五街集」「新橋夜曲」「柳橋竹枝」「芳町哀歌」「淺草情調」—吉井氏は此集に於て更に紅燈華かなる東京の情調を心ゆく迄歌ひたり。「紅燈行」以下新作三百數十首、これ歌はれたる『東京情話』也、歌はれたる『東京美人譜』也。

□夢二氏の裝畫は濃艶の限りを盡くせり

白蓮　伊藤燁子夫人新著

新作歌集

幻の華

女史の著書頻々出づ
而もその新作を集めたるは本書あるのみ

■出版界空前の美本　本文舶來上等一色刷　忽ち六版　價壹圓五拾錢　郵送料八錢

人あまりに美しくして、運命あまりに哀し。火の國の女王と謳はるゝ白蓮女史伊藤夫人が祕めたる戀の惱みを洩らせる新作の歌集は出でたり。一卷五百有餘首、身を呪ひ、世を憤りて首々實に絶世の悲調、まことに誦するに堪へざるものあり。竹柏園主人の推して現代女流歌人の第一となせるもの偶然にあらず。裝幀は夢二畫伯が泣血の苦心に成り、目眩ゆきばかりの燦爛たる極美本也。

戀愛小品

草櫻

綠川春作氏著
竹久夢二氏畫

近松西鶴以下幾多の作家によつて傳へられたる戀の物語を且つ描き且つ叙せるものにして、散文詩とも見る可き眞珠の如き小品數十篇、戀に生き戀に死せる幾多の男女をして其哀史を語らしむ。讀者はそこに甘き囁きと思ひ迫れる溜息とを聞く可く、恥らひと啜り泣きと、怨みとほゝゑみと、戀の種々相は曲盡して剩すなし

特製濃艶極美本
價六拾錢送料六錢

157
232

終